

2011年3月7日

ラオス一村一品運動をエコツーリズムとして推進するための調査ツアー結果報告

有限会社リボーン 代表取締役

エコツーリズムプロデューサー 壺岐健一郎

実施期間：2011年2月20日～26日 6日間（ラオス滞在5日間）

訪問先：ビエンチャン パクセ ベンダーン村その他集落 サワンナケート

行程素描：

成田からタイ航空機でバンコクへ。4時間の乗り継ぎ時間を経て、ラオスの首都ビエンチャンに着いた。アジアで日本からの直行便がないのが、不便とも言えるが、海外旅行スピード化時代にあって、考えようによっては旅の浪漫を演出する効果もある。そして、玄関口としての空港到着口付近が、また、通常とは異なる。静かなのだ。夜といっても、他のアジア諸国では大勢の人々がたむろし、喧騒が出迎えてくれる。噂には聞いていたが、時代から取り残された国（誤解されてはいけないが、旧きよき時代を感じさせる国）との第一印象を持った。



小さな首都ビエンチャンの市内観光は半日で十分。パトゥーサイ（凱旋門）の外観と展望台からの景観、ワット・シーサケット寺院では戦乱のラオスを偲ぶことができる。ラオス最大の仏舎のあるタートルアンでは、壮大で豪華な仏像、彫刻に加えて、門前の露天商で売る「幸せを呼ぶ放鳥」が穏やかな国民性を感じさせてくれる。しかし、売り子の財布にあったたくさんのタイ紙幣パーツからラオスの周辺国との位置づけも垣間見た。一步、郊外に足を伸ばせば田園地帯が広がる。乾季の今は一面ブラウンだが、農耕シーズンになるとグリーンの世界が広がることだろう。ビエンチャン空港の北部には首都の台所に供給する野菜畑が広がっていたが、唐辛子、ナスが中心だった。サトウキビからラム酒を製造する日本人オヤジグループが生き生きと活動していたのが印象に残る。このような高純度のラム酒をこの地で飲めるとは想像していなかったが、日本人の気質がいい具合にブレンドされていた。



一村一品運動を確かめるために南部に飛んだ。パクセから少し南に下るとバナナ繊維抽出織のホアイフン村。村の中心部の集会所には 20 名以上の女性たちが集まって、巧みな機織り作業をしていた。原料となるバナナの幹から繊維を剥がす作業も体験したうえで、機織り体験。結局は実際の作業はまったくせず（難しくてできない）記念写真だけで終了。一人一人色合いやデザインも異なり、選ぶのも大変だが、いいものを見つける喜びや、製作者との交流が体験ツーリズムの持ち味でもある。



ホームステイ先はラタン製品を生み出すベンダーン村。各家の軒下ではラタンを材料にした籠やミニテーブルづくりが行われていた。ラタン以上に目立ったのが細長い 2m 以上もあるタピオカの木。主食の原料とするだけあってどの家にもたくさん立てかけてあった。